

W. A. ロブソン, D. E. リーガン編

『世界の大都市』第3版

William A. Robson and D. E. Regan (ed.), *Great Cities of the World, their government, politics and planning*, 3rd ed., 2vols., 1972.

田 中 守

「大都市地域の発展は、世界のいたるところに見受けられる現象となった。洋の東西を問わず、すべての大陸で、開発の先進国にも後進国にも、資本主義下にも共産主義下にも、新しい国にも古い国にも、大都市が存在する。このことは、現代に特有の動向であり、今や計り知れぬ重大性を帯びるに至っている。」(本書26頁)わが国でも、大都市問題は現下の最緊要かつ至難の課題である。仮に人口規模を基準にして100万以上を擁するものを大都市とすれば、全世界を通じてその数は約50にのぼるが、このうちには日本の都市が8つも含まれる。しかもなお、急速な勢いで都市化(urbanization)が進んでいる。その意味で、わが国は正に「大都市国家」とでも称すべきであろう。このような現実に対して、従来、大都市に関する科学研究に見るべきものが乏しかったことは、深く省みられなければならない。最近、ようやく都市問題や都市政策への関心と研究が高まってきたことは、いささか遅きに失する嫌いはあるが、せめてものことと思われる。

英国が生んだ現代行政学の泰斗ウィリアム・A・ロブソン教授は、早くから大都市研究の必要を痛感しておられた先覚者である。巖山政道先生によれば(本書第2版の日本版—1958年刊行—における「監修者のことば」)、ロブソン教授は、1939年にロンドン大都市研究を公刊した頃から、既に本書の編綴を発想されていた。その企画は、第2次大戦の勃発によって、一

時、中断のやむなきに至ったが、平和回復とともに、直ちに世界各国の都市行政研究者に呼びかけ、その協力を得て宿願を達成したのが、1954年に上梓を見た本書第1版である。次で1957年には早くも改訂第2版が出され、これには第1版に所収の20都市のほか、東京と大阪など4都市が追加された。

72年の新刊第3版には、さらに改訂増補が施されて、2巻に分冊をみたばかりでなく、各都市の執筆者にも新人が加わった。編著者にもロブソン教授のほか、D・E・リーガン博士（ロンドン・スクールの行政学講師）が参加し、これまでのロブソン教授に代って新しくロンドンの章を執筆している。

第3版も、その序文に記述されているごとく、本質的には前著と異なるものではなく、世界の大都市を選んでその行政を詳述するとともに、これらの巨大地域社会が同様の要因に基づく共通の諸課題にどのように当面しており、且ついかにこれらを克服しようとしているかを考究することを目的とするものである。また、体系としても、第1部がロブソン教授の手に成る総論「今日の大都市」、第2部が各都市ごとの詳論であることも、旧版と揆を一にしている。しかし、内容についてみると、新版では次に掲記する諸点において前著と異なるところがある。

- (1) 第1部の総論も改訂増補されたこと。
- (2) 第2部の都市も27に増加したこと。
- (3) 旧版に所載の都市も新しい事実と資料によって書き改められたこと。
- (4) 各都市の冒頭にその都市の地図を挿入したこと。
- (5) 各巻末に都市ごとの主要参考文献が詳細に掲げられたこと。

何しろ2巻1075頁におよぶ大著であり、ここにその片鱗を伝えることすら困難と思われる。せめて、ロブソン教授の所説の結論部分を抄記して、本稿の責をふさぎたい。ロブソン教授は、総論の結論で、大都市問題を、①大都市の区域と行政機関の組織、②市民の関心と民主的参加、③自治体行政の能率、④財政、⑤大都市地域の計画、の5点に要約して論述し、終

結部に「明日の大都市地域」(The Metropolitan Region of Tomorrow)という標題を掲げて、「都市が大きくなればなるほど誰にとってもよいものだという安易な仮説が、19世紀に普及した。……しかし、大都市を無条件に受け入れ、無制限に増大させる時代は過ぎつつある。今や既に、形の定まらぬ、ぶざまに拡がってゆく大都市には、これまでと何か異なったものに変容させてしまうような新しい想念で立ち向うべき時代にきている。今日では、大都市の効果的な計画には、その地域的規模と人口に最大限度の限定をおこななければ、助かる道がないことが明らかである。」(124—125頁)と述べ、そのためには、職場の配置に対する制限を行なうことが基本的な手段であること、次に、過密化した住居地域における人口の分散(dispersal)と流出(overspill)の必要から、中心部の過密地区と大都市地域周辺部の郊外、町村および住宅団地との間に、合理的な線に沿って、人口を再配置すべきこと、さらに、都市部と農村部との紛争を防止するために、その間に明確な境界線を引くことが肝要であること、以上の3点を対策として主張する。(125—126頁)その論究するところは、まさしく肯綮に当たっている。しかし、これらはすべて既に第2版で叙述したことの反復に止まり、その後15年を隔てた第3版に何ら新しい方策ないし提案が付加されていないことは物足りない。現代の大都市問題は、果して上記の3方法のみで解決するであろうか。われわれの直面する大都市の諸課題は、極めて複雑であり深刻である。また、各都市ごとに、それぞれ歴史的沿革や個性もあろうし、住民特有の地域的感情もあろう。まことに、現下の大都市が提起する諸問題に対処することは、至難の業といわなければならない。

第2部は、前記のとおり、各都市の詳論である。すなわち、アムステルダム、ベルグラード、バーミンガム、ブエノス・アイレス、カイロ、カルカッタ、シカゴ、コペンハーゲン、デリー、イバダン(以上第1巻所収)、ロンドン、ロサンジュルス、マニラ、メキシコ・シティ、ニューヨーク、パリ、プレトリアとヨハネスブルグ、リオ・デ・ジャネイロ、ローマ、ストックホルム、シドニー、東京と大阪、トロントとモントリオール、ワル

シヤワ（以上第2巻所収）の27都市が集録されている。いずれも、それぞれの都市事情に精通した学究や研究的な実務家の執筆によるもので、この点だけでも、編者が序文に自負するごとく、「本書は、世界中に散在する20有餘の大都市地域に関し、各国にわたる多数執筆者の知識と経験とを集大成した書物としては、現在なお唯一のものである。」といえよう。

編者の当初における意図は、その「寄稿者執筆要領」(Editorial Statement for the Guidance of Contributors)によれば、次に列挙する項目と序列により、各都市の記述を期待したようである。

- (1) 概括的緒論
- (2) 大都市政府の諸機関
- (3) 政党についての考察
- (4) 都市の権限と機能
- (5) 行政組織と職員構成
- (6) 財政
- (7) 上級機関との諸関係
- (8) 計画と開発
- (9) 境界問題
- (10) 予想される将来の発展
- (11) 結論

各都市の叙述は、必ずしも厳密には上記の項目に拠っていない。しかし、いずれもこれらの要点に言及しているし、なかには政治史的叙述や文化的考察などを加えたものまであって多彩である。

残念なのは、第2版に比して、9都市が新しく加えられた反面、6つの都市が脱落したことで、特にモスクワとマンチェスターを欠いたのは、編者も述懐するとおりに、惜まれてならない。また、都市の選択についても再考すべき点がある。編者の意図が世界の各大陸に及ぼうとしたことは首肯できるとしても、首都でもないイバダン（人口63万—『毎日年鑑・'72年版による。』）のごとき中都市まで加える必要があったらうか。『世界の大都

市』という書名に背くものがあるように思われる。むしろ, 中華人民共和国の首都北京(人口も757万—昨年2月14日発表の『国連統計年鑑・'71年版による。)や人口実に1082万を算える(同上)世界最大の都市上海等は, 必然的に参加を求められてよいであろう。これらの諸点に関しては, 将来, さらに第4版が発刊されるとすれば, その機会に完整を期待したい。なお, 些事のようにあるが, 前版に見られた各都市の写真が全部削除されてしまったことも, 経済的理由によるものとはいえ, 幾分か心残りである。

本書にはこのような欠点が存することは否定できないが, それらはすべて瑕瑾というべきであろう。一昨年11月に東京で開催された「世界大都市会議」にもうかがえるごとく, 現代の大都市問題は, 国境を越えて論議せられ考究されねばならぬ重要課題である。大ロンドン改革に参加し, これを指導してなしたげた碩学の編述による本書は, この課題への挑戦に力を与えてくれる, 最も貴重な価値ある良書として推すに躊躇するものではない。

「神は農村をつくり給い, 人は都市をつくった。」といわれる。現代の大都市には, 確かに余りにも人間臭い醜悪な側面も存在するが, ロブソン教授が説くとおり, 「大都市には愛好し賞賛すべき多くのものがある。大都市は, 技芸や文学や科学の面で人間が最高の成果を成就した原産地であり, 自由と解放の力が湧出した源泉でもある。」(127頁) われわれも, ロブソン教授とともに, 「常に大都市を知り大都市を愛する者として, その行政, 政治および計画を改善し, もって市民生活の質的向上にあらゆる努力を尽くしたいものである。」(同上)